
シリーズ

「化学から見た物性物理」

はじめに：

近年、物性研究の分野において、物理と化学の境界など、もはや存在しないというのが当たり前のことになりつつあり、そのこと自体を意識される方はほとんどおられないかもしれません。

特に実験系の分野では、20年くらい前までは、物理の人達は自ら試料を合成をすることはほとんどなく、専ら測定の方法や装置の改良を進めて、より精細な実験結果を得ることを目的とし、逆に化学の人々は試料を合成することが主な目的で、自前でできないような物性測定はその道のプロである物理屋さんに丸投げしてしまうという、ある種の棲み分けが存在していました。

ところが、近年の試料合成や物性測定手段の進歩（誰でもできるようになったことが進歩かどうかは議論の余地がありますが）が、主要な原因となって、もちろん物理さんも試料合成は行うし、また非常に精巧な測定技術を持つ化学屋さんも数多くおられます。

では、果たして境界はなくなってしまったのでしょうか？ つまるところ、やはり研究者のバックグラウンドや個性がその方の研究に色濃く反映されるものと思われれます。

そこで本誌では、化学の立場から広い意味での物性研究に携わっている方々に、最近の研究を紹介していただくことを目的として、シリーズ「化学から見た物性物理」を企画しました。特に、テーマにはこだわらず、内容が散発的になるのはご容赦頂きたいのですが、最近の研究を通して化学屋さんの視点というものを、広く物理屋さんに知っていただけるよう、順次掲載していく予定です。

「物性研究」編集委員会